

日蓮大聖人御書全集

いっしょうじょうぶっしょう

一生成仏抄

新版
316
ゝ
318

いっしょうじょうぶつしょう

一生成仏抄

けんちよう

ねん

建長7年('55)

さい

34歳

ときじょうにん

(富木常忍)

そ

むし

しょうじ

とど

たびけつじよう

むじようぼだい

夫れ、無始の生死を留めて、この度決定して無上菩提を

しょう

おも

しゅじようほんぬ

みようり

かん

証せんと思わば、すべからく衆生本有の妙理を觀ずべし。

しゅじようほんぬ

みようり

みようほうれんげきよう

ゆえ

衆生本有の妙理とは、妙法蓮華經これなり。故に、

みようほうれんげきよう

とな

しゅじようほんぬ

みようり

かん

妙法蓮華經と唱えたてまつれば、衆生本有の妙理を觀ず

るにてあるなり。

もんりしんしょう

きようおう

もんじそくじつそう

じつそうそくみようほう

文理真正の經王なれば、文字即実相なり、実相即妙法

せん

いっしんほうかい

むね

と

あらわ

なり。ただ詮ずるところは、一心法界の旨を説き顯すを

みようほう

な

ゆえ

きよう

しよぶつ

ちえ

い

妙法と名づく。

故に、この経を「諸仏の智慧」とは云う

いっしんほうかい

むね

じっかいさんぜん

えしよう

しきしん

ひじようそうもく

なり。一心法界の旨とは、十界三千の依正・色心・非情草木・

こくうさつど

のぞ

塵

のこ

いちねん

こころ

おさ

虚空刹土、いずれも除かずちりも残らず一念の心に収めて、

いちねん

こころ

ほうかい

へんまん

さ

ばんぼう

い

この一念の心、法界に遍満するを指して、万法とは云うな

りかくち

いっしんほうかい

い

り。この理を覚知するを、一心法界とも云うなるべし。

みようほうれんげきよう

とな

たも

こしん

ほか

ただし、妙法蓮華経と唱え持つというとも、もし己心の外

ほう

おも

まった

みようほう

そほう

そほう

に法ありと思わば、全く妙法にあらず、麤法なり。麤法は

こんきよう

こんきよう

ほうべん

ごんもん

今経にあらず。今経にあらずれば、方便なり、権門なり。

ほうべん

ごんもん

おし

じようぶつ

じきどう

じようぶつ

方便・権門の教えならば、成仏の直道にあらず。成仏の

じぎょう

たしょうじょう

しゅぎょう

へ

じょうぶつ

直道にあらざれば、多生曠劫の修行を経て成仏すべきに

ゆえ

いつしやうじやうぶつかな

ゆえ

みやうほう

とな

あらざる故に、一生成仏叶いがたし。故に、妙法と唱え

れんげ

よ

とき

わ

いちねん

さ

みやうほうれんげきやう

な

蓮華と読まん時は、我が一念を指して妙法蓮華經と名づく

ふか

しんじん

おこ

るぞと深く信心を發すべきなり。

いちだいはちまん

しやうぎやう

さんぜじつぼう

もろもろ

ぶつぼさつ

わ

すべて一代八万の聖教、三世十方の諸の仏菩薩も、我

まゝ

ほか

あ

おも

が心の外に有りとはゆめゆめ思ふべからず。しかれば、

ぶつきやう

なら

しんしやう

かん

まった

しやうじ

はな

仏教を習うといえども、心性を觀ぜざれば、全く生死を離

しんげ

どう

もと

まんぎやうまんぜん

しゆ

るることなきなり。もし心外に道を求めて万行万善を修せ

たと

びんぐ

ひと

にちや

となり

たから

かぞ

んは、譬えば、貧窮の人、日夜に隣の財を計えたれども、

はんせん とくぶん

半銭の得分もなきがごとし。

てんだい しゃく なか ところ かん

しかれば、天台の釈の中には「もし心を観ぜざれば、

じゅうざいめつ

むりよう くぎよう

重罪滅せず」とて、もし心を観ぜざれば、無量の苦行とな

はん ゆえ ひと ぶつぽう がく

ると判ぜり。故に、かくのごときの人をば、「仏法を学して

げどう は しかん

外道となる」と恥じしめられたり。ここをもつて、止観には

ぶつきよう がく かけん どう しゃく

「仏教を学すといえども、還つて外見に同ず」と釈せり。

ほとけ みな とな きようかん 読 はな 散

しかるあいだ、仏の名を唱え、経巻をよみ、花をちらし、

こう 拈 みな わ いちねん おさ くどく ぜんこん

香をひねるまでも、皆、我が一念に納めたる功德・善根なり

しんじん と

と信心を取るべきなり。

じようみようきよう

なか

しよぶつ

げだつ

しゆじよう

これによつて、浄名経の中には「諸仏の解脱を衆生の

しんぎよう もと

しゆじようそくぼだい

しやうじそくねはん

あ

心行に求めば、衆生即菩提なり、生死即涅槃なり」と明か

しゆじよう

こころ

汚

ど

こころきよ

せり。また「衆生の心けがるれば土もけがれ、心清けれ

ど きよ

じようど

えど

ど

ふた

へだ

ば土も清し」とて、浄土といい穢土というも、土に二つの隔

われ

こころ

ぜんあく

み

しゆじよう

てなし、ただ我らが心の善悪によると見えたり。衆生とい

ほとけ

まよ

とき

しゆじよう

な

うも仏というも、またかくのごとし。迷う時は衆生と名づ

さと

とき

ほとけ

な

たと

あんきよう

みが

け、悟る時をば仏と名づけたり。譬えば、閻鏡も磨きぬれ

たま

み

ただいま

いちねんむみよう

めいしん

みが

ば玉と見ゆるがごとし。只今も、一念無明の迷心は磨かざる

かがみ

みが

かなら

ほつしようしんによ

みようきよう

な

鏡なり。これを磨かば、必ず法性真如の明鏡と成るべ

し。

ふか しんじん おこ

にちやちようぼ

おこた

みが

深く信心を發して、日夜朝暮にまた懈らず磨くべし。い

みが

なんようほうれんげきよう

とな

かようにしてか磨くべき。ただ南無妙法蓮華經と唱えたてま

磨

つるを、これをみがくとはいうなり。

みよう

なん

こころ

わ

いちねん

こころ

そもそも、妙とは何という心ぞや。ただ我が一念の心

ふしぎ

みよう

い

ふしぎ

こころ

およ

不思議なるところを妙とは云うなり。不思議とは、心も及

ことば

およ

ばず語も及ばずということなり。しかればすなわち、起こ

いちねん

こころ

たず

み

あ

い

るところの一念の心を尋ね見れば、有りと云わんとすれば

いろ

かたち

な

い

ようよう

こころ

お

色も質もなし。また無しと云わんとすれば様々に心起こ

る。あ おも有りと思うべきにあらず、な おも無しと思うべきにもあらず。

う む ふた有無の二つの語も及ばず、う む ふた有無の二つの心も及ばず。う む有無

にあらずしてしかも有無に遍して、う む へん中道一実の妙体にし

ふ し ぎて不思議なるを妙とは名づくるなり。みようこの妙なる心を名

づけて法ともいうなり。ほうこの法門の不思議をあらわすに、ほうもん ふ し ぎ譬

じ ほうえを事法にかたどりて蓮華と名づく。象 れんげ な一心を妙と知りぬれ

てん よ し んばまた転じて余心をも妙法と知るところを、し妙経とはい

うなり。ぜんあくしかればすなわち、つ善悪に付いて起こり起こると

ねんしんころの念心の当体を指して、とうたい さこれ妙法の体と説き宣べたる

きようおう

じようぶつ

じきどろ

経王なれば、成仏の直道とはいふなり。

むね ふか しん

みようほうれんげきよう とな

いっしょうじようぶつ

この旨を深く信じて妙法蓮華経と唱えば、一生成仏さ

うたが

ゆえ

きようもん

われめつど

のち

らに疑いあるべからず。故に、经文には「我滅度して後に

まさ

きよう

じゆじ

ひと

ぶつどろ

において、応にこの経を受持すべし。この人は仏道において、

けつじよう

うたが

宣

ふしん

決定して疑いあることなけん」とのべたり。ゆめゆめ不審

いっしょうじようぶつ

をなすべからず。あなかしこ、あなかしこ。一生成仏の

しんじん

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

信心、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

にちれん

かおう

日蓮

花押